



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子ども臨床研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 13, 83-84
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73659
Type	other
File Information	090-1882-1707-13.pdf



子ども臨床研究部門

1. セミナー及び研究会

以下の子どもの心理臨床や特別支援教育に関わる講習会、ワークショップ、シンポジウムを行った。

(1)臨床と研究のための交流会

第1回交流会

テーマ：第1回交流会（参加者の実践・研究の紹介と意見交流）

日 時：7月20(金)19時～21時

参加者：約30名

第2回交流会

テーマ：家族支援を考える

日 時：11月9日 19時～21時

参加者：約20名

話題提供者：渡邊隆史（NPO 法人 ジャイフル）、安達潤（子ども臨床部門）

第3回交流会

テーマ：診断前支援を考える

日 時：3月1日 19時～21時

話題提供者：氏家武（氏家記念こどもクリニック）、関あゆみ（子ども臨床部門）

(2)特別支援教育士継続研修会 全5回

（S.E.N.S 北海道支部会 共催）

対 象：教育関係者、医療・福祉関係者

テーマ：心理検査アセスメント及び指導支援に関する事例検討会5回実施

日 時：6月30日、10月13日、12月2日、1月19日、3月19日 いずれも2時間

参加者：各回30名

2. ディスレクシア支援室

本支援室での相談・支援活動は、医療機関等既に診断を受けている事例を対象とし、研究協力への同意の下に行っている。心理学的諸検査を実施し、その結果に基づいて心理・教育的な指導方法の提案・実施を行う。関あゆみ、室橋春光（学

外研究員）、橋本竜作（学外研究員）の3名と大学院生（岩田みちる、宇野智己、後藤重矢子）、研究生（柳内景太）で運営している。院生や支援者の研修としても位置付けており、「障害・臨床心理学総合講義（学習障害）」の受講者（前期4名、後期3名）、博士課程院生3名、教育医療関係者3名が参加した。本年度の参加者（研究協力者）は小学1年生から高校生までの11名（新規6名／再来5名）、支援・相談回数はのべ61回（1月末時点）であった。

8月11～12日には「ディスレクシア合宿」を行った。これは子どもへの学習支援、保護者への情報提供、子ども・保護者間の交流を目的とするものである。親子6組13名、スタッフ・大学院生15名が参加した。昨年度までに支援が終了となった高校生2名がサブスタッフとして参加した。

3. RTI モデルを用いたひらがな音読支援

江別市教育委員会（2小学校）、士別市教育委員会（1小学校）と連携し、「T式ひらがな音読支援」による支援を行った。この支援法では、在籍する全ての1年生を対象として学期ごとにひらがな音読能力を評価し、その結果に基づいて短時間の読み練習を行う。さらに支援が必要な児童には2年時に週1回の個別指導を行う。学期毎の評価と読み練習・個別支援は各学校の教員が中心となっており、センター研究員は教員への研修・助言、評価時の補助、3年生以降の対応についての助言を行った。

4. 発達障害の子どもを中心としたグループ活動及び相談アセスメント支援

H30年度は就学前の子供を対象にした実行機能及び社会情動発達に焦点を当てた幼児グループを月2回行った。参加スタッフは、岡田智、愛下啓恵（学外研究員）、難波友里（札幌市保健センター

心理士)、岡田博子(同左)、石崎滉介(教育学院)、6名の学生スタッフである。これらの活動は、院生・学生には発達障害援助実習、発達心理学実習、障害・臨床心理学総合講義の授業としても位置づいた。

また、科学研究費補助金「発達障害特性の影響因を加味した知能検査解釈の構築」の研究の一環として、地域の発達アセスメントのニーズのある幼児から学齢児とその保護者の相談を受け、アセスメント及び相談、幼稚園や小学校へのコンサルテーションを行った。6件、合計18回の相談支援をおこなった。

5. 高機能広汎性発達障害の子ども・青年・成人の本人活動

北海道高機能広汎性発達障害児者親の会札幌支部との連携協力により、高機能広汎性発達障害の

子ども・青年・成人の本人活動を、学生ボランティア、院生ボランティアが参加する形で9月を除く6月～12月の毎月実施した。9月の活動中止は胆振東部地震の発生によるものである。活動には、北海道教育大学札幌校の特別支援教育専攻の学生も参加しており、毎回の参加人数は学生が教育大生を合わせて12～13名、院生2～3名、当事者8～9名であった。活動はレクリエーション中心で8月には宿泊キャンプを実施した。党活動では本人活動に並行して、親部会の茶話会も実施されており、学生および院生の希望者は親部会にも参加して、保護者の生の声に接する機会も持つことができている。発達障害援助実習としても機能し、センター研究員のディレクターによる支援実践のアドバイスも受けることができ、実践的な教育と臨床の視点を積むことができている。